

歌よみに与ふる書

正岡子規

青空文庫

歌よみに与ふる書

おおせ
 仰のごとく近来和歌は一向にふる振り不もうさず申候。正直に申し候えば
 『万葉』以来、さねとも実朝以来、一向に振り不申候。実朝という人は
 三十にも足らでいざこれからというところにてあえなき最期を遂
 げられまことに残念致し候。あの人をして今年も活いかしておい
 たならどんなに名歌をたくさん沢山残したかも知れ不申候。とにかくに
 第一流の歌人と存候。ぞんじあながち人丸ひとまる、赤人あかひとの余唾よだを舐ねぶるでも

なく、もとより貫之つらゆき、定家ていかの糟粕そうはくをしやぶるでもなく自己の本領屹然きつぜんとして山岳と高きを争い日月と光を競うところ実に畏おそるべく尊むべく覚え膝ひざを屈するの思い有これあり之候。古来凡庸ほんようの人と評し来りしは必ず誤あやまりなるべく、北条ほうじょう氏を憚りて韜晦とうかいせし人かさらずば大器晩成の人なりしかと覚え候。人の上に立つ人にて文学技艺に達したらん者は人間としては下等の地に居るが通例なれども、実朝は全く例外の人に相違無これなく之候。何ゆえと申すに、実朝の歌はただ器用というのではなく力量あり見識あり威勢いせいあり、時流に染まず世間に媚こびざるところ例の物数奇連中や死に歌よみの公卿達くけいととても同日には論じがたく、人間として立派な見識のある人間ならではの实朝の歌のごとき力ある歌は詠みいでら

れまじく候。真淵まぶちは力を極めて実朝をほめた人なれども真淵のほめ方はまだ足らぬように存候ぞんじ。真淵は実朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりしゆえに可有これあるべく之候。

真淵は歌につきては近世の達見家にて『万葉』崇拜のところなど当時これありにありて実にえらいものに有之候せいえども、生らの眼より見ればなお『万葉』をも褒め足らぬ心地致候。真淵が『万葉』にも善よき調しらべあり悪あしき調ありといふことをいたく氣にして繰り返し申し候は世人が『万葉』中の佶屈きつくつなる歌を取りて「これだから万葉はだめだ」などと攻撃するを恐れたるかあいと相見え申候もうし。もとより真淵自身もそれらを善き歌とは思わざりしゆえに弱みもいで候いけん。しかしながら世人が佶屈と申す『万葉』の歌や真淵が悪

き調と申す『万葉』の歌の中には生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。それをいかにというに他の人は言うまでもなく真淵の歌にも生が好むところの万葉調というものは一向に見^{みあたり}当不申候。(もつともこの辺の論は短歌につきての論と御承知可被^{くださるべく}下候) 真淵の家集を見て真淵は存外に『万葉』の分^{わか}らぬ人と呆^{あき}れ申候。かく申し候とて全く真淵をけなす訳にては無之候。楫取魚彦は『万葉』を模^{すくな}したる歌を多く詠みいでたれど、なおこれと思うものは極めて少^{すくな}く候。さほどに古調は擬しがたきにやと疑い居り候ところ、近来生らの相知れる人の中に歌よみにはあらでかえつて古調^{たくみ}を巧に模する人少からぬことを知り申候。これによりて観^みれば、昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遥^{はるか}に劣り候やらんと

心細く相あいな成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候わんにはいかが申すべき。

長歌のみはやや短歌と異なり申候。『古今集』の長歌などは箸はしにも棒にもかからず候えども、かような長歌は『古今集』時代にも後世にもあまり流行はやらざりしこそもつけの幸さいわいと存ぜられ候なれ。されば後世にても長歌を詠む者にはただちに『万葉』を師とする者多く、従つてかなりの作を見受け申候。今日とても長歌を好んで作る者は短歌に比すれば多少手際善く出来申候。(御歌会派おうたかいの気まぐれに作る長歌などは端唄はうたにも劣り申候)しかしある人は難じて長歌が『万葉』の模型を離るるあたわざるを笑い申候。それももつともには候えども、歌よみにそんなむつかしいことを注文

致し候わば『古今』以後ほとんど新しい歌がないと申さねば相あいな
成るまじく間敷候。なおいろいろ申し残したることは後こうこう鴻に譲り申候。
不具。

〔『日本』明治三十一年二月十二日〕

再び歌よみに与ふる書

貫^{つらゆき}之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有^{これあり}之候。

その貫之や『古今集』を崇拜するはまことに氣の知れぬことなど
 と申すものの、実はかく申す生^{せい}も数年前までは『古今集』崇拜の
 一人にて候^{そうら}いしかば、今日世人が『古今集』を崇拜する氣味^{きみあい}合は
 よく存^{ぞんじもうし}申候。崇拜して居る間はまことに歌というものは優美
 にて『古今集』はことにその粹^{すい}を抜きたるものとのみ存候いしも

三年の恋いつちよう一い朝ちようにさめてみればあんな意気地いくじのない女に今まで
 ばかされて居つたことかとかやくやくも腹立たしく相あいな成なり候。まず
 『古今集』という書を取りて第一枚を開くとただちに「去年こぞとや
 いはん今年とやいはん」という歌が出て来る実に呆あきれ返つた無趣
 味の歌に有之候。日本人と外国人との合の子を日本人とや申さん
 外国人とや申さんとしやれたると同じことにて、しやれにもなら
 ぬつまらぬ歌に候。このほかの歌とても大同小異にて駄洒落だじゃれか理
 屈つぽいもののみ有之候。それでも強しいて『古今集』をほめて
 言わばつまらぬ歌ながら『万葉』以外に一風を成したるところは
 取得とりえにて、いかなる者にも始めての者は珍らしく覚え申候。た
 だこれを真ま似ねるをのみ芸とする後世の奴こそ気の知れぬ奴には候

なれ。それも十年か二十年のことならともかくも、二百年たつても三百年たつてもその糟粕そうはくを嘗なめて居る不見識には驚いりき入候。何代集の彼かン代集のと申しても皆『古今』の糟粕の糟粕の糟粕ばかりに御座ござ候。

貫之とても同じことに候。歌らしき歌は一首も相見あいえ不もうさず申候。かつてある人にかく申し候ところその人が「川風寒く千鳥鳴くなり」の歌はいかがにやと申され閉口いたし致候。この歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。しかしほかにはこれくらいのも一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候。「人はいさ心もしらず」とは浅はかなる言いざまと存候。但ただし貫之は始めてかようなことを申候者にて古人の糟粕にては無これなく之候。詩にて申候えば

『古今集』時代は宋時代そうにもたぐえ申すべく俗気紛々ふんぶんと致し居候おりところはとて唐詩とうしとくらぶべくも無之候えども、さりとしてそれを宋の特色として見れば全体の上より変化あるも面白く、宋はそれにてよろしく候いなん。それを本尊にして人の短所を真似る寛政かんせい以後の詩人は善よき笑あはい者に御座候。

『古今集』以後にては『新古今』ややすぐれたりと相見え候。

『古今』よりも善よき歌を見かけ申候。しかしその善よき歌と申すも指折りて数えるほどのことに有之候。定家ていかという人は上手か下手か訳の分らぬ人にて、『新古今』の撰定せんていを見れば少しは訳わかの分わかつて居るのかと思えば自分の歌にはろくなもの無之「駒こまとめて袖そでうちはらふ」「見わたせば花も紅葉もみじも」などが人にもてはやさる

るくらいのものに有之候。定家を狩野派かのうの画師に比すれば探幽たんゆうと善く相似あいたるかと存候。定家に傑作なく探幽にも傑作なし。しかし定家も探幽も相当に練磨の力はありていかなる場合にもかなりにやりこなし申候。両人の名譽は相如あいしくほどの位置に居りて、定家以後歌の門閥を生じ探幽以後画の門閥を生じ、両家とも門閥を生じたる後は歌も画も全く腐敗致候。いつの代いかなる技芸にても歌の格画の格などというような格がきまつたらもはや進歩致す間敷まじく候。

香川景樹は『古今』貫之崇拜にて見識の低きことは今更申すまでも無之候。俗な歌の多きこともむろんに候。しかし景樹には善よき歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは

景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ、ただ景樹時代には貫之時代よりも進歩して居る点があるといふことは相違なければしたがつ従て景樹に貫之よりも善き歌が出来るというも自然のことと存候。景樹の歌がひどくぎよくせきこんこう玉石混淆であるところは俳人でいうとりようた蓼太に比するが適當と被おもわれ思候。蓼太は雅俗巧拙の両極端を具そなえた男でその句に両極端が現れ居候。かつ満身のはき覇氣でもつて世人を籠ろうらく絡し全国に夥おびただしき門派の末流をもつて居たところなども善く似て居るかと存候。景樹を学ぶなら善きところを学ばねばはなはだしき邪路に陥り可もうすべく申、今の景樹派などと申すは景樹の俗などところを学びて景樹よりも下手につらね申候。ちぢれ毛の人がそくはつ束髪に結びしを善きことと思ひて束髪にゆう人はわざわざ毛

をちぢらしたらんがごとき趣有之候。ここのところよくよくかつが潤
 眼んを開いて御判別可あるべく有候。古今上下東西の文学などよく比較
 して御覽可なざるべく被成、くだらぬ歌書ばかり見て居つては容易に自己
 の迷まよを醒いましがたく見るところ狭ければ自分の汽車の動くのを知
 らで隣の汽車が動くように覚おぼゆるものに御座候。不ふ尽じん。

〔『日本附録週報』明治三十一年二月十四日〕

三たび歌よみに与ふる書

前略。歌よみのごとく馬鹿なのんきなものはまたと無^{これなく}之候。

歌よみのいうことを聞き候えば、和歌ほど善^よきものは他になき由^{よし}

いつでも誇り申^{もうし}候えども、歌よみは歌よりほかのものは何も知ら

ぬゆえに歌が一番善きように自^{うぬほれ}惚候次第に有^{これあり}之候。彼らは歌

にもつとも近き俳句すら少しも解せず、十七字でさえあれば川^{せんり}

柳^{ゆう}も俳句も同じと思うほどののんきさ加減なれば、まして支那

の詩を研究するでもなく西洋には詩というものがあるやらないや
 らそれも分わからぬ文盲浅学、まして小説や院いんぽん本も和歌と同じく文
 学というものに属すと聞かば定めて目を剥むいて驚き可もうすべく申候。
 かく申さば讒ざん謗罵詈ぼうばりを知らぬしれ者と思う人もあるべけれど、
 實際なれば致いたしかた方無之候。もし生せいの言げんが誤れりと思さばいわゆ
 る歌よみの中よりただの一人にても俳句を解する人を御指名可くださ
 被るべく下候。生は歌よみに向むかいて何うらみの恨も持たぬにかく罵詈がまし
 き言を放たねばならぬように相あいなり成候心のほど御察被下度候。
 歌を一番善いと申すはもとより理屈もなきことにて一番善い訳
 は毫べいごうも無之候。俳句には俳句の長所あり、支那の詩には支那の詩
 の長所あり、西洋の詩には西洋の詩の長所あり、戯曲、院本には

戯曲、院本の長所あり、その長所はもとより和歌の及ぶところに
 あらず候。理屈は別としたところで一体歌よみは和歌を一番善い
 ものと考えた上でどうするつもりにや、歌が一番善いものならば
 どうでもこうでも上手でも下手でもみそひともじ三十一文字並べさえすりや天
 下第一のものであつて、秀逸と称せらるる俳句にも漢詩にも洋詩
 にもまさ優りたるものと思ひ候ものにや、その量見が聞きたく候。最
 も下手な歌も最も善き俳句、漢詩等に優り候ほどならば誰も俳句、
 漢詩等に骨折る馬鹿はあるまじく候。もしまた俳句、漢詩等にも
 和歌より善きものあり和歌にも俳句、漢詩等よりあし悪きものありと
 いうならば和歌ばかりが一番善きにてもあるまじく候。歌よみの
せんけん浅見には今更のようあきに呆れ申候。

俳句には調がなく、和歌には調がある、ゆえに和歌は俳句に勝まされりとある人は申し候。これはあながち一人の論ではなく歌よみ仲間にはかような説を抱く者多きことと存候ぞんじ。歌よみどもはいたく調ということを誤解いたしおり致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な様を歌うにはなだらかなる長き調を用うべく、悲哀とか慷慨こうがいとかにて情の迫りたる時、または天然にても人事にても景象の活動はなはだしく変化の急なる時これを歌うには迫りたる短き調を用うべきは論ずるまでもなく候。しかるに歌よみは調はすべてなだらかなるものとのみ心得候こころえと相見え申候。かかる誤あやまりきたを来すも畢ひつきよう竟従来ひつぎようの和歌がなだらかなる調子のみを取り来りしによるものにて、俳句も漢詩も見ず歌集

ばかり読みたる歌よみにはしか思わるるも無理ならぬことと存候。さてさて困つたものに御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なることは分り申さざるやらん。しかし迫りたる調強き調などいう調の味はいわゆる歌よみには到底分り申す間敷か。ましき真淵まぶちは雄々おおしく強き歌を好み候えども、さてその歌を見ると存外に雄々しく強きものは少く、すくな実朝さねともの歌の雄々しく強きがごときは真淵には一首も見あたらず候。「飛ぶ鷺わしの翼もたわに」などいえるは真淵集中の佳かじゆう什にて強き方の歌なれども意味ばかり強くて調子は弱く感ぜられ候。実朝をしてこの意匠を詠ましめばかような調子には詠ままじく候。「もののふの矢なみつくろふ」の歌のごとき鷺を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向なら

ねど、調子の強きことは並ぶものなくこの歌を誦しょうすれば霰あられの音を聞くがごとき心地致候。真淵すでにしかりとせば真淵以下の歌よみは申すまでもなく候。かかる歌よみに蕪村派ぶそんの俳句集か盛唐せいとうの詩集か読ませたく存候えども、驕おごりきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を読むことは承知致すまじく勧めるだけが野暮やぼにや候べき。

御承知のごとく生は歌よみよりは局外者とか素人しろうととかいわるる身に有之、従つて詳しき歌の学問は致さず格が何だか文法が何だか少しも承知致さず候えども、大体の趣味いかににおいては自ら信ずるところあり、この点につきてかえつて専門の歌よみが不注意を責むるものに御座候。かように悪口をつき申さば生を弥次やじう

馬連まれんと同様に見る人もあるべけれど、生の弥次馬連なるか否かは
 貴兄は御承知のことと存候。異論の人あらば何なんびと人ひとにても来訪あ
 るよう貴兄より御伝え被下度三日三夜なりともつづけさまに議論
 いたすべく
 可いたすべく致候。熱心の点においては決して普通の歌よみどもには負
 け不もうさず申候。情激し筆走り候まま失礼の語も多かるべく御海容ごかいよう
 可被下候。拜具はいぐ。

〔『日本』明治三十一年二月十八日〕

四たび歌よみに与ふる書

拜啓。空論ばかりにては傍人ぼうじんに解しがたく、实例につきて評
 せよとの御言葉ごもつともと存候ぞんじ。实例と申しても際限もなきこ
 とにていずれを取りて評すべきやらんと惑い候えども、なるべく
 名高きものより試み可もうすべく申候。御思いあたりの歌ども御知らせ
 被下度候くだされたく。さて人丸の歌にかありけん

もののふの八十氏川やそうじがわの網代木あじろぎに

いぎよふ波のゆくへ知らずも

というがしばしば引きあいに出されるように存候。この歌万葉時代に流行せるいっきかせい一気呵成の調にて少しも野卑やひなるところはなく字句もしまり居り候えども、全体の上より見れば上三句は贅物ぜいぶつに属し候。「足引あしびきの山鳥の尾の」という歌も前置まえおきの詞多けれど、あれは前置の詞長きために夜の長き様さまを感じられ候。これはまた上三句全く役に立ち不もうさず申候。この歌を名所の歌の手本に引くは大たわけに御座候。総じて名所の歌というはその地の特色なくては叶かなわず、この歌のごとく意味なき名所の歌は名所の歌になり不申候。しかしこの歌を後世の俗気紛々たる歌に比ぶれば勝まさること万ばん々に候。かつ、この種の歌は真似まねすべきにはあらねど多き中

に一首二首あるは面白く候。

月見れば千々に物こそ悲しけれ

我身一つの秋にはあらねど

という歌は最も人の賞する歌なり。上三句はすらりとして難なけれども、下二句は理屈なり蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶるものなるに理屈を述ぶるは歌を知らぬゆえにや候らん。この歌下二句が理屈なることは消極的に言いたるにても知れ可申、もし「我身一つの秋と思ふ」と詠むならば感情的なれども、秋ではないがと当り前のことをいわば理屈に陥り申候。かような歌を善しと思ふはその人が理屈を得離れぬがためなり、俗人は申すに及ばず今のいわゆる歌よみどもは多く理屈を並べて楽しみ居候。厳格に言わ

ばこれらは歌でもなく歌よみでもなく候。

芳野山霞よしのやまがすみの奥は知らねども

見ゆる限りは桜なりけり

八田知紀はつたとものりの名歌とか申候。知紀の家集ははまだ読まねど、こ

れが名歌ならば大概底も見え透すき候。これも前と同じく「霞の

奥は知らねども」と消極的に言いたるが理屈に陥り申候。すでに

「見ゆる限りは」という上は見えぬところは分らぬがという意味

はその裏うちに籠こもり居り候ものをわざわざ「知らねども」とことわり

たる、これが下手と申すものに候。かつこの歌の姿、「見ゆる限

りは桜なりけり」などいえるも極めて拙つたなく野卑やひなり、前の千里ちさとの

歌は理屈こそ悪あしけれ姿は遙はるかに立ちまさり居候。ついでに申さんに

消極的に言えば理屈になると申ししこといつでももしかかなりというに非ず、客観的の景色を連想していう場合は消極にても理屈にならず、例えば「駒こまとめて袖そでうち払ふ影もなし」といえるがごときは客観の景色を連想したるまでにてかくいわねば感情を現すあたわざるものなればむろん理屈にては無これなく之候。また全体が理屈めきたる歌あり（釈しゃつ教きょうの歌の類）これらはかえつて言いようにて多少の趣味を添うべけれど、この芳野山の歌のごとく全体が客観的すなわち景色なるにその中に主観的理屈の句がまじりては殺風景いわん方なく候。また同人の歌にかありけん

うつせみの我世わがよの限り見るべきは

あらし嵐の山の桜なりけり

というが有^{これあり}之候由^{よし}、さてさて驚き入^いつたる理屈的の歌にては候よ。嵐山の桜のうつくしいと申すはむろん客観的のことなるにそれをこの歌は理屈的に現したり、この歌の句法は全体理屈的の趣向の時に用うべきものにして、この趣向のごとく客観的にいわざるべからざるところに用いたるは大俗のしわざと相^{あい}見え候。「べきは」と係^かけて「なりけり」と結びたるが最も理屈的殺風景のところには有之候。一生嵐山の桜を見ようというも変なくだらぬ趣向なり、この歌全く取^{とりどころ}所無之候。なお手当り次第可^{もうしあぐべく}申上候なり。

〔『日本』明治三十一年二月二十一日〕

五たび歌よみに与ふる書

心あてに見し白雲は麓ふもとにて

思はぬ空に晴るる不尽ふじの嶺ね

というは春海はるみのなりしやに覚え候。これは不尽ふじの裾すそより見上げし
 時の即興せいなるべく、生せいも実際にかく感じたることあれば面白き歌
 と一時は思いしが、今いま見れば拙つたなき歌に有これあり之候。第一、麓ふもととい
 う語いかげや、「心あてに見し」ところは少すくなくも半腹はんぶくくらい

高さなるべきを、それを麓ふもとというべきや疑わしく候。第二、それは善よしとするも「麓ふもとにて」の一句理屈りくつぼくなつて面白からず、ただ心あてに見し雲よりは上にありしとばかり言わねばならぬところところに候。第三、不尽の高さく壮さかんなる様さまを詠よまんとならば今少し力強ちからき歌ならざるべからず、この歌の姿弱よわくして到底不尽ふじんに副そい申まさず候。几董きとうの俳句はいくに「晴るる日や雲を貫く雪の不尽」というがあり、極めて尋常じゆんじやうに叙じゆし去りたれども不尽の趣おもむきはかえつて善く現れ申ま候。

もしほ焼く難波なにわの浦うらの八重霞やえがすみ

一重ひとえはあまのしわざなりけり

契けい 沖ちゆう

の歌にて俗人の伝称するものに有これあり之候これありえども、この

歌の品下りたることはやや心ある人は承知いたしおる致居ぞんじことと存候。この歌の伝称せらるるは、いうまでもなく八重一重の掛かけあわせ合あにあるべけれど余の攻撃点もまたここにほかならず、総じて同一の歌にて極めてほめるところと他の人の極めて誹そしるところとは同じ点にあるものに候。八重霞というものもとより八段わかに分れて霞みたるにあらねば、一重ということ一向に利き不もうさず申、また初はじめに「藻汐もしお焼やく」と置きしゆえ後に煙とも言いかねて「あまのしわざ」と主観的に置きたるところいよいよ俗に墮おち申候。こんな風に詠まずとも、霞の上に藻汐や焚やく煙のなびく由よし尋常に詠まばつまらぬまでもかかる厭味いやみは出来申間敷もうすまじく候。

心あてに折らばや折らむ初霜はつしもの

置きまどはせる白菊の花

この躬恒みつねの歌「百人一首」にあれば誰も口ずさみ候えども、一文半文のねうちも無これなき之駄歌に御座候。この歌は嘘うその趣向なり、初霜が置いたくらいで白菊が見えなくなる気遣きづかい無これなく之候。趣向嘘なれば趣も糸瓜へちまも有これあり之不申もうさず、けだしそれはつまらぬ嘘なるからにつまらぬにて、上手な嘘は面白く候。例えば「鵲かささぎのわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」面白く候。躬恒のは瑣細ささいなことをやたらに仰ぎょうさん山に述べたのみなれば無趣味なれども、家持やかもちのは全くないことを空想で現わしてみせたるゆえ面白く被かんぜられ感候。嘘を詠むなら全くないこととてつもなき嘘を詠むべし、しからざればありのままに正直に詠むが宜よろしく候。雀すずめが舌

剪きられたとか狸たぬきが婆ばばに化けたなどの嘘うそは面白おもしろく候。今朝は霜がふ
 っつて白菊が見えんなどと真ま面目まじめらしく人を欺あざむく仰山あやむ的てきの嘘うそは極め
 て殺風景に御座候。「露の落つる音」とか「梅の月が匂におふ」とか
 いうことをいうたのして楽たのしむ歌よみが多く候えども、これらも面白おもしろから
 ぬ嘘うそに候。すべて嘘うそというものは一、二度は善よけれど、たびたび
 詠よまれては面白おもしろき嘘うそも面白おもしろからず相あいな成なり申候。まして面白おもしろからぬ
 嘘うそはいうまでもなく候。「露の音」「月の匂におい」「風の色」などは
 もはや十分なれば今後の歌には再び現れぬよう致したく候。「花
 の匂におい」などいおかた方かたは嘘うそなり、桜などには格別の匂においは無之、
 「梅の匂におい」でも『古今』以後の歌よみの詠むように匂におい不申候。

春の夜の闇やみはあやなし梅の花

色こそ見えね香かやは隠るる

「梅闇に匂ふ」とこれだけで済むことを三十一文字に引きのぼしたる御苦労加減は恐れ入いったものなれど、これもこの頃には珍らしきものとして許すべく候わんに、あわれ歌人よ「闇に梅匂ふ」の趣向はもはや打うちどめに被成なされてはいかがや。闇の梅に限らず普通の梅の香も『古今集』だけにて十余りもあり、それより今日までの代々の歌よみがよみし梅の香はおびただしく数えられもせぬほどなるに、これも善い加減に打ちとめて香水香料に御用い被成候は格別そのほか歌には一切これを入れぬこととし、鼻つまりの歌人と嘲あざけらるるほどに御遠ざけ被成てはいかがや。小さきことを大きくきくいう嘘が和歌腐敗の一大原因と相見え申候。

〔『日本』明治三十一年二月二十三日〕

六たび歌よみに与ふる書

御書面を見るに愚意ぐいを誤解いたされ被致候。ことに変なるは御書面中
四、五行の間に撞どう著有ちやくこれあり之候。初はじめに「客観的景色に重きを措おき
て詠むべし」とあり、次に「客観的にのみ詠むべきものとも思わ
れず」云々うんぬんとあるはいかに。生せいは客観的にのみ歌を詠めと申し
たることは無これなく之候。客観に重きをおけと申したることもなけれ
ど、この方は愚意ぐいに近きよう覚え候。「皇国の歌は感情もとを本とし

て「云々とは何のことに候や。詩歌に限らずすべての文学が感情を本とすることは古今東西相違あるべくも無之、もし感情を本とせずして理屈を本としたるものあらばそれは歌にても文学にてもあるまじく候。ことさらに皇国の歌はなど言わるるは例の歌よりほかに何物も知らぬ歌よみの言かげんと被あやしまれ怪候。「いずれの世にいずれの人が理屈を読みては歌にあらずと定め候や」とは驚きたる御問おんといに有之候。理屈が文学に非ずとは古今の人東西の人ことごとく一致したる定義にて、もし理屈をも文学なりと申す人あらばそれは大方おおかた日本の歌よみならんと存候ぞんじ。

客観、主観、感情、理屈の語につきてあるいは愚意を誤解被いたさ致居れおるにや。全く客観的に詠みし歌なりとも感情を本としたるは

言を^ま疎たず。例えは橋の^{たもと}袂に柳が一本風に吹かれて居るといふことをそのまま歌にせんにはその歌は客観的なれども、もとこの歌を作るというはこの客観的景色を美なりと思ひし結果なれば感情に本づくことはもちろんにて、ただうつくしいとか奇麗とかうれしいとか楽しいとかいふ語を著^つくると著けぬとの相違に候。また主観的と申す内にも感情と理屈との區別有之、生が排斥するは主観中の理屈の部分にして、感情の部分には無之候。感情的主観の歌は客観の歌と比してこの主客両観の相違の点より優劣をいふべきにあらず、されば生は客観に重きをおく者にて無之候。^{ただし}但和歌俳句のごとき短きものには主観的佳句よりも客観的佳句多しと信じ居^お候えは、客観に重きをおくというもこのことを意味する

と見れば 差さしつかえ 支つかえ 無之候。また主観客観の區別、感情理屈の限界は實際判然したるものに非ずとの御論はごもつとも候。それゆえに善悪可否巧拙と評するももとより劃かくぜん 然たる區別あるに非ず、巧の極端と拙の極端とは毫も紛まぎ るるところあらねど巧と拙との中間にあるものは巧とも拙とも申し兼かね 候。感情と理屈の中間にあるものはこの場合に当り申もうし 候。

「同じ用語同じ花月にてもそれに対する吾人ごじんの觀念と古人のと相違すること珍しからざることにて」云々、それはもちろんのことなれどそんなことは生の論ずることと毫も關係無之候。今は古人の心を忖そんたく 度するの必要無之、ただここにては古今東西に通ずる文学の標準（自らかく信じ居る標準なり）をもって文学を論評す

るものに有之候。昔は風帆船ふうはんせんが早かつた時代もありしかど、蒸気船を知りて居る眼より見れば風帆船は遅しと申すが至当の理に有之、貫之つらゆきは貫之時代の歌の上手とするも前後の歌よみを比較して貫之より上手の者ほかに沢山たくさん有之これありと思わば、貫之を下手と評することまた至当に候。歴史的に貫之を褒めるならば生もあながち反対にては無之候えども、ただ今の論は歴史的にその人物を評するにあらず、文学的にその歌を評するが目的に有之候。

「日本文学の城壁とも謂いうべき国歌」云々とは何事ぞ。代々の勅ちよくせんしゅう撰集のごときものが日本文学の城壁ならば実に頼すくなみ少なき城

壁にて、かくのごとき薄ツペらな城壁は大砲一発にて滅茶滅茶に砕もうすべくけ可もうすべく申候。生は国歌を破壊し尽すの考かんがえにては無之、日本文

学の城壁を今少し堅固に致したく、外国の髯ひげづらどもが大砲をはな発
 とうが地雷火を仕掛けようがびくとも致さぬほどの城壁に致した
 き心しん願がん有之、しかも生を助けてこの心願を成就せしめんとする
おおだんな大檀那は天下一人もなく数年来鬱うっせき積せき沈滞せるもの頃けい日じつよう
 やく出口を得たることとて前後錯ぜんご雑序ざくじょ次倫なく大言疾呼たいげんしつこ我な
 がら狂せるかと存候ほどの次第に御座候。傍人より見なば定めて
 狂人の言とさげすまるることと存候。なおこのたび新聞の余白を
 借り伝えたるを機つぎとし思うさま愚考も述べたく、それだけにては
 愚意わか分わかりかね候に付愚作つぎをも連ねて御評願ごへいがんいたく存ぞん居じ候えど
 も、あるいは先輩諸氏の怒いかりに触ふれて差止さしとめらるるようなことはな
 きかとそののみ心配まかりあり罷ばい在候。心配、恐懼きょうく、喜悦、感慨、希

望等に悩まされて従来の病体ますます神経の過敏を致し日来睡眠ひごろに不足を生じ候次第愚とも狂とも御笑い可被下候。くださるべく

従来の和歌をもつて日本文学の基礎とし城壁となさんとするは

弓矢劍槍けんそうをもつて戦わんとすると同じことにて明治時代に行わ

るべきことにては無之候。今日軍艦あがなを買い大砲を買い巨額の金を

外国に出すも畢ひつきよう竟日本国を固むるにはかならず、されば僅きんし

少ようの金額にて買い得べき外国の文学思想などは続々輸入して日

本文学の城壁を固めたく存候。生は和歌につきても旧思想を破壊

して新思想を注文するの考かんがえにて、したがって用語は雅語、俗語、

漢語、洋語、必要次第用うるつもりに候。委細後便。こうびん

追おつて 「伊勢の神風、宇佐の神勅しんちよく」云々の語あれども文

学には合理非合理を論ずべきものにては無^{これなく}之、従つて非合理
 は文学に非ずと申したること無之候。非合理のことにて文学的
 には面白きこと不^{すくなからず}少候。生の写実と申すは合理非合理、事
 実非事実の謂^{いい}にては無之候。油画師は必ず写生に依^より候えども
 それで神や妖^{よう}怪^{かい}やあられもなきことを面白く画き申候。しか
 し神や妖怪を画くにももちろん写生に依^よるものにて、ただあり
 のまゝを写生すると一部一部の写生を集めるとの相違に有之、
 生の写実も同様のことに候。これらは大誤解に候。

〔『日本』明治三十一年二月二十四日〕

七たび歌よみに与ふる書

前便に言い残し候こと今少し申もうしあげ上候。宗匠的俳句と言えばただちに俗気を連想するがごとく、和歌といえばただちに陳腐を連想いたし致候が年来の習慣にて、はては和歌という字は陳腐という意味の字のごとく思われ申候。かく感ずる者和歌社会には無これなしぞんじ之と存候えど歌人ならぬ人は大おお方かたかやうの感を抱き候やに承り候。おりおりは和歌を誹そしる人に向むかいてきて和歌はいかように改良すべき

かと尋ね候えばその人が首をふつていやとよ和歌は腐敗し尽したるにいかでか改良の手だてあるべき置きね置きねなど言いはなし候様はあたかも名医が匙さじを投げたる死しにぎわ際の病人に対するがごとき感を持ち居候おりものと相見あいえ申候。実げにも歌は色青ざめ呼吸絶えんとする病人のごとくにも有これあり之候よ。さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰えたれ形骸けいがいはなお保つべし、今にして精神を入れ替えなば再び健全なる和歌となりて文壇ちちくに馳駆するを得うべきことを保証致候。こはいわでものことなるをある人がはやこと切れたる病人と一般みなに見做みし候はいかにも和歌の腐敗のはなはだしきに呆あきれて一見して拋棄ほうきしたるものにや候べき。和歌の腐敗のはなはだしきもこれにて大方知れ可もうすべく申候。

この腐敗と申すは趣向の変化せざるが原因にて、また趣向の變化せざるは用語のすくな少きが原因と被ぞんぜられ存候。ゆえに趣向の變化を望まば是非とも用語の区域を広くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も變化可いたすべく致候。ある人が生せいをもく目して和歌の区域を狭くする者と申し候は誤解にて、少しにても広くするが生の目的に御座候。とはいえいかに区域を広くするとも非文学的思想は容れ不もうさず申、非文学的思想とは理屈のことに有これあり之候。

外国の語も用いよ外国に行わるる文学思想も取れよと申すことにつきて日本文学を破壊するものと思惟しする人も有之げに候えども、それはすでに根本において誤り居候。たとい漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも、はたサンスクリットの詩を作るとも日

本人が作りたる上は日本の文学に相違無之候。唐制に摸して位階も定め服色も定め年号も定めおき唐からぶりたる冠衣かんいを著つけ候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英国の軍艦を買い独国の大砲を買いそれで戦いくさに勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝かちと可申候。しかし外国の物を用うるはいかにも残念なれば日本固有の物を用いんとかんがえの考ならばその志には賛成致候えども、とても日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文学にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候わばいかなるものが出来いでき候べき。『源氏物語』『枕草子まくらのそうし』以下漢語を用いたるものを排斥致し候わば日本文学はいくばくか残り候べき。それでも瘦やせ我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らん

と決心したる人あらばそは御勝手次第ながら、それをもつて他人を律するは無用のことに候。日本人が皆日本固有の語を用うるに至らば日本は成り立つまじく、日本文学者が皆日本固有の語を用いたらば日本文学は破滅いたすべく可致候。

あるいは姑息こそくにも馬、梅、蝶、菊、文等の語はいと古き代より用いきた来りたれば日本語と見みな做すべしなどいう人も可有これあるべく之候えど、いと古き代の人はその頃新しく輸入したる語を用いたるものにてこの姑息論者が当時に生れ居らばそれをも排斥致し候いけん。いと笑うべき撞どうちやく着きに御座候。仮に姑息論者に一步を借して古き世に使いし語をのみ用うるとして、もし王朝時代に用いし漢語だけにてても十分にこれを用いなばなお和歌の変化すべき余地は多少

可有之候。されど歌の詞ことばと物語の詞とは自おのずから別なり、物語などにある詞にて歌には用いられぬが多きなど例の歌よみは可もつすべく申候。何たる笑うべきことには候ぞや。いかなる詞にても美の意を運ぶに足るべきものは皆歌の詞と可申、これをほかにして歌の詞といふものは無これなく之候。漢語にても洋語にても文学的に用いられなば皆歌の詞と可申候。〔『日本』明治三十一年二月二十八日〕

八たび歌よみに与ふる書

悪あしき歌の例を前に挙げたれば善よき歌の例をここに挙げ可もうすべく申

候。悪あしき歌といひ善よき歌というも四つや五つばかりを挙げたりとて愚ぐい意を尽すべくも候わねど、無なきには勝まさりてんといささか列つらね申もうし候。まず『金きん槐かい和歌集』などより始め申もうしさんか。

武もの士のふの矢や並なみつくるふ小手こての上うへに霰あられたばしる那須のすの篠のほ

原はら

という歌は万口ばんこう一斉いつせいに歎賞たんしょうするように聞き候きまうえば今更いまさら

 取りいでていわでものことながらお御氣おきのつかれぎざることもや

 と存候ぞんじまま一応もうしあげ申上候まうしあげ。この歌の趣味は誰しも面白しと思う

 べく、またかくのごとき趣向が和歌には極めて珍めづしきことも知ら

 ぬ者はあるまじく、またこの歌が強つよき歌なることも分わかり居ゐり候まうえ

 ども、この種の句法がほとんどこの歌に限かぎるほどの特色をなし居

 るとは知らぬ人ぞ多く候まうべき。普通に歌は「なり」、「けり」、

 「らん」、「かな」、「けれ」などのごとき助辞すくなをもつて幹旋あつせん

 せらるるにて名詞の少すくなきが常なるに、この歌に限りては名詞極たぎめ

 て多く「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一、二個の動詞

 も現在になり（動詞の最もつとも短たんき形）居おり候まう。かくのごとく必要なる材

料をもつて充実したる歌は実にすくな少く候。『新古今』の中には材料の充実したる句法の緊密なる、ややこの歌に似たるものあれど、なおこの歌のごとくは語々活動せざるを覚え候。『万葉』の歌は材料極めて少く簡単をもつて勝るもの、さねとも実朝一方にはこの『万葉』を擬し、一方にはかくのごとくはてんこう破天荒の歌をなす、その力量実に測るべからざるもの有これあり之候。また晴を祈る歌に

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ
 というがあり、恐らくは世人の好まざるところとぞんじ存候えども、こ
 は生せいの好きで好きでたまらぬ歌に御座候。かくのごとくいきおい勢強き恐
 ろしき歌はまたと有これあるまじく之間敷、八大竜王を叱咤しつたするところ竜王も
しょうふく懼伏致すべき勢相現れ申候。八大竜王と八字の漢語を用いた

るところ「雨やめたまへ」と四三の調ちようを用いたるところ皆この歌の勢を強めたるところにて候。初三句は極めて拙つたなき句なれどもその一直線に言い下して拙つたなきところかえつてその真しん率そつ偽いつわりなきを示して祈晴きせいの歌などには最も適當いたしおり致いたしおり居候。実朝はもとより善き歌作らんとてこれを作りしにもあらざるべく、ただ真心より詠み出いでたらんがなかなか善き歌とは相成り候いしやらん。ここらは手のさきの器用ろううを弄し言葉のあやつりにのみ拘こだわる歌よみどもつまびらかもうすべくの思い至らぬ場所に候。三句切ぎれのことはなお他日詳つまびらかもうすべくに可申候。えども三句切の歌にぶつつかり候ゆえ一言致いたしおき置候。三句切の歌詠むべからずなどいは守しゆしゆ株しゆの論にて論ずるに足らず候えども三句切の歌は尻しり軽くなるの弊へい有之候。この弊を救うために下二

句の内を字余りにすることしばしば有之、この歌もその一にて

(前に挙げたる大江千里の「月見れば」の歌もこの例。なおそ

のほかにも数え尽すべからず)候。この歌のごとく下を字余りに

する時は三句切にしたる方かえつて勢強くあいなりもうし相成申候。取りも

直さずこの歌は三句切の必要を示したるものに有これあり之候。また

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかな親の

子を思ふ

のごとき何も別にめずらしき趣向もなく候えども、いっきかせい一気呵成のと

ころかえつて真心を現して余りあり候。ついでに字余りのこと一ち

よつと寸申候。この歌は第五句字余りゆえに面白く候。ある人は字余

りとは余儀なくするものと心得候えどもさにあらず、字余りには

およそ三種あり、第一、字余りにしたるがために面白きもの、第
 二、字余りにしたるがため悪あしきもの、第三、字余りにするとせ
 ずとも可なるものと相わか分れ申候。その中にもこの歌は字余りにし
 たるがため面白きものに有之候。もし「思ふ」というをつめて
 「もふ」など吟じ候わんには興味索さく然ぜんと致し候。ここは必ず八
 字に読むべきにて候。またこの歌の最後の句にのみ力を入れて
 「親の子を思ふ」とつめしは情の切なるを現すものにて、もし
 「親の」の語を第四句に入れ最後の句を「子を思ふかな」「子や
 思ふらん」など致し候わば例のやさしき調となりて切なる情は現
 れ不もつ申さず、従つて平凡なる歌と相成可もつ申す候。歌よみは古来助
 辞を濫らん用よう致し候様、宋人の虚字を用いて弱き詩を作るに一般に

御座候。実朝のごときは実に千古の一人と存候。

前日来生せいは客観詩をのみ取る者と誤解被いたされ致候いしも、そのし
 からざるは右の例にて相分り可申那須の歌は純客観、後の二首は
 純主観にてともに愛あいしよう誦あうするところに有之。しかしこの三首ば
 かりにては強き方に偏し居候えはあるいはまた強き歌をのみ好む
 かと被かんがえられ考候わん。なお多少の例歌を挙ぐるを御待まちくださるべく可被下
 候。

〔『日本』明治三十一年三月一日〕

九たび歌よみに与ふる書

『槐集』^い以外に遷^{うつ}り候べく候。
 一々に論ぜんもうるさければただ二、三首を挙げおきて『金^{きんか}』

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめ
 やも

箱根路をわが越え来れば伊豆の海やおきの小島に波のよ
 る見ゆ

世の中はつねにもがもななきさ漕ぐ海人の小舟の綱手か

なしも

大海おおみのいそもとどろによする波われてくだけでさけて

散るかも

「箱根路」の歌極めて面白けれども、かかる想は今古に通じたる
 想なれば実朝さねともがこれを作りたりとて驚くにも足らず、ただ「世
 の中は」の歌のごとく古意古調なるものが『万葉』以後において
 しかも華麗を競うたる『新古今』時代において作られたる技量に
 は驚かざるを得ざる訳にて、実朝の造詣ぞうけいの深き今更申すも愚か
 に御座候。大海の歌実朝のはじめたる句法にや候わん。

『新古今』に移りて二、三首を挙げんに

なごの海の霞かすみのまよりながむれば入日いりひを洗ふ沖つ白波

(実定さねさだ)

この歌のごとく客観的に景色を善く写したるものは『新古今』以前にはあらざるべく、これらもこの集の特色として見るべきものに候。惜おしむらくは「霞のまより」という句が疵きずにて候。一面にたなびきたる霞に間まというも可笑おかしく、よし間ありともそれはこの趣向に必要ならず候。入日も海も霞みながらに見ゆるこそ趣は候なれ。

ほのぼのと有明の月の月影は紅葉吹きおろす山おろしの風 (信明)

これも客観的の歌にて、けしきも淋さびしく艶えんなるに語を畳みかけ

て調子取りたるところ、いとめずらかに覚え候。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵いおを並べん冬の山

里さいぎよう
(西行)

西行の心はこの歌に現れ居候おり。「心なき身にも哀れは知られけ

り」などという露骨的歌が世にもてはやされてこの歌などはかえ

つて知る人少すくなきも口惜くちおしく候。「庵を並べん」というがごとき斬ざ

新んしんにして趣味ある趣向は西行ならでは得え言わざるべく特に「冬

の」と置きたるもまた尋常歌よみの手段にあらざと存候ぞんじ。後年芭ば

蕉しょうが新あらたに俳諧はいかいを興おこせしも寂さびは「庵を並べん」などより悟ご入にゆう

し季の結び方は「冬の山里」などより悟入したるに非あざるかと被お

思もわれ候。

り
ねや 閨の上にかたえさしおほひこのも外面なる葉広柏はびろがしわに霰あられふるな
 (能因)

これも客観的の歌に候。上三句複雑なる趣を現さんとてやや混雑に陥りたれど、葉広柏に霰のはじく趣は極めて面白く候。

岡の辺べの里のあるじを尋ぬれば人は答へず山おろしの風
 (慈円)
じえん

趣味ありて句法もしつかりと致し居候。この種の歌の第四句を「答へで」などというがごとく下に連続する句法となさば何の面白味も無これなく之候。

さざ波や比良山風ひらの海吹けば釣あまする蟹そでの袖かへる見ゆ

(読人しらず)

实景をそのままに写し、些さの巧もてあそを弄もてあそばぬところかえつて興多く候。

神風たまぐしや玉串たまぐしの葉をとりかざし内外うちとの宮に君をこそ祈れ

(俊恵しゅんえ)

神祇じんぎの歌といえは千代の八千代のと定きまり文句もんくを並ぶるが常なる

にこの歌はすつぱりと言いはなしたるなかなかに神の御心にかなうべく覚え候。句のしまりたるところ半ば客観的に叙じよしたるところなど注意すべく「神風や」の五字も訳なきようなれど極めて善く響き居候。

阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいの仏たちわが立つそま杣そまに冥加あらせ

たまへ (伝教でんぎよう)

いとめでたき歌にて候。長句の用い方など古今未曾有にてこれを詠みたる人もさすがなれどこの歌をちよくせんしゆう勅撰集みぞうに加えたる勇氣も称するに足るべくと存候。第二句十字の長句ながら成語なればさまで口にたまらず、第五句九字にしたるはことさらにもあらざるべけれど、このところはことさらにも九字くらいにする必要有之これあり、もし七字句などをもつて止めたらんには上の十字句に對して釣つりあい合取あひれ不もうさず申候。初めの方に字余りの句あるがために後にも字余りの句を置かねばならぬ場合はしばしば有之候。もし字余りの句は一句にても少きが善しなどという人は字余りの趣味を解せざるものにや候べき。〔『日本』明治三十一年三月三日〕

十たび歌よみに与ふる書

先輩崇拜ということはいずれの社会にも有これあり之候。それも年長者に対し元げんくん勲くんに対し相当の敬礼を尽すの意ならば至当のことなれども、それと同時に何かは知らずその人の力量技術を崇拜するに至りては愚の至りに御座候。田舎の者などは御歌所おうたどころといええらあつまい歌人の集り、御歌所長といええば天下第一の歌よみのように考え、従つてその人の歌と聞けば読まぬ内からはや善よきものと定

め居るなどありうちのことにて生せいも昔はその仲間の一人に候いき。
 今より追想すれば赤面するほどのことに候。御歌所とてえらい人
 が集まるはずもなく御歌所長とて必ずしも第一流の人が坐すわるにも
 あらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無かひむの時なれどそれでも御
 歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有これあるべく之候。田舎の者が
 元勲を崇拜し大臣をえらい者に思い政治上の力量も識見も元勲大
 臣が一番に位する者と迷信いたし致候結果、新聞記者などが大臣を誹そしる
 を見て「いくら新聞屋が法螺吹ほらいたとて、大臣は親任官、新聞屋
 は素寒貧すかんぴん、月と泥亀すつぼんほどの違いだ」などと罵り申候。少し眼
 のある者は元勲がどれくらい無能力かということ大臣は廻まわり持もちに
 て新聞記者より大臣に上りし実例あることくらいは承知致し説き

聞かせ候えども、田舎の先生は一向無頓着むとんちやくにて不相変あいかわらず元勲崇
 拝なるも腹立たしき訳に候。あれほど民間にてやかましくいう政
 治の上なおしかりとすれば今まで隠居したる歌社会に老人崇拜の
 田舎者多きも怪むあやしに足らねども、この老人崇拜の弊を改めねば歌
 は進歩いたすべからず不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤きせん
 も無これなく之候。歌よまんとする少年あらば老人などにかまわず勝手
 に歌を詠むが善かるべくと御伝言可被くださるべく下候。明治の漢詩壇が振
 いたるは老人そちのけにして青年の詩人が出たるゆえに候。俳句
 の観を改めたるも月並連つきなみれんに構わず思う通りを述べたる結果にほ
 かならず候。

縁語を多く用うるは和歌の弊なり、縁語も場合によりては善け

れど普通には縁語かけ合せあわなどあればそれがために歌の趣を損ずるものに候。よし言いおおせたりとてこの種の美は美の中の下等なるものと存候ぞんじ。むやみに縁語を入れたがる歌よみはむやみに地ぢぐちぢゃれゃれ口駄洒落を並べたがる半可通はんかつうと同じく御当人は大得意なれども側はたより見れば品の悪きこと夥おびただしく候。縁語に巧ろうを弄ろうせんよりは真率んそつに言いながしたるがよほど上品に相見あいえ申候もうし。

歌というといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ぼたん」とは言わず「ふかみぐさ」と詠むが正当なりとか、この詞ことばはこうは言わず必ずこういうしきたりのものぞなど言わるる人これあ有あり之候りえどもそれは根本においてすでに愚考ことなおりと異り居候。愚考は古人のいうた通りに言わんとするにてもなく、しきたりに倣ならわん

とするにてもなくただ自己が美と感じたる趣味をなるべく善く分
 るように現すが本来の主意に御座候。ゆえに俗語を用いたる方そ
 の美感を現すに適せりと思わば雅語を捨てて俗語を用い可^{もうすべく}申、
 また古来のしきたりの通りに詠むことも有^{これあり}之候えど、それはし
 きたりなるがゆえにそれを守りたるにては無^{これなく}之、その方が美感
 を現すに適せるがためにこれを用いたるまでに候。古人のしきた
 りなど申せども、その古人は自分が新^{あらた}に用いたるぞ多く候べき。
 牡丹^{ぼたん}と深見草^{ふかみぐさ}との區別を申さんに生^{せい}らには深見草というより
 も牡丹という方が牡丹の幻影^{いちじるし}早く著く現れ申候。かつ「ぼたん」
 という音の方が強くして、實際の牡丹の花の大きく凜^{りん}としたると
 ころに善く副^そい申候。ゆえに客觀的に牡丹の美を現さんとすれば

牡丹と詠むが善き場合多かるべく候。

新奇なることを詠めというと汽車、鉄道などいいうゆる文明の器械を持ち出す人あれど大に量見おおいが間違まちがい居候。文明の器械は多く不風流ぶふうりゆうなるものにて歌に入りがたく候えども、もしこれを詠まんとならば他に趣味あるものを配合するのほか無之候。それを何の配合物もなく「レールの上に風が吹く」などとやられては殺風景きわみの極きわみに候。せめてはレールの傍かたわらに堇すみれが咲いて居るとか、または汽車の過ぎた後で罌粟けしが散るとか薄すすぎがそよぐとか言うように他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。また殺風景なるものは遠望よろする方宜よろしく候。菜の花むこの向うに汽車が見ゆるとか、夏草の野末を汽車が走るとかするがごときも殺風景を消す一手段か

と存候。

いろいろ言いたきまま取り集めて申もうしあげ上候。なお他日つまびら詳かに
申上ぐる機会も可有これあるべく之候。以上。月日。

〔『日本』明治三十一年三月四日〕

青空文庫情報

底本：「子規選集 第七巻 子規の短歌革新」増進会出版社

2002（平成14）年4月12日初版第1刷発行

初出：歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898（明治31）年2月12日

再び歌よみに与ふる書「日本附録週報」

1898（明治31）年2月14日

三たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898（明治31）年2月18日

四たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年2月21日

五たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年2月23日

六たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年2月24日

七たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年2月28日

八たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年3月1日

九たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898 (明治31) 年3月3日

十たび歌よみに与ふる書「日本」日本新聞社

1898（明治31）年3月4日

※「八たび歌よみに与ふる書」の章末に「本巻所収の文では、この時から子規は上の句と下の句とを別行に書く形を廃しているの
で、以下、短歌は一行に組んでいる」とあるので、短歌の組み方が「八たび歌よみに与ふる書」以前と以降で異なるのは、底本通りです。

入力：kompass

校正：高瀬竜一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌よみに与ふる書

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>